

# 第5回桃山学院大学図書館書評賞受賞作一覧

## 〔優秀書評賞〕

根来 厚志（国際教養学部3年次生）

伊坂 幸太郎『ラッシュライフ』新潮社 2005年

中川 洋子（文学部4年次生）

須賀 敦子『コルシア書店の仲間たち』（須賀敦子全集第1巻所収）河出書房新社 2000年

## 〔佳作〕

木谷 友子（文学部4年次生）

瀬尾 まいこ『図書館の神様』マガジンハウス 2003年

高橋 未央（経済学部1年次生）

重松 清『十字架』講談社 2009年

堂馬 悠理香（法学部4年次生）

勝間和代、香山リカ『勝間さん、努力で幸せになれますか』朝日新聞出版 2010年



## 〔総合講評〕

図書館長 経済学部教授 滝田 和夫

図書館書評賞は今年度で第5回目となった。昨年度は締切日前日の台風襲来の影響もあり応募作品数が50篇と少なかったが、今年度はそれを超える88篇の応募があった。受賞作品の選考は各学部から選出されている図書館委員5名による投票と審議によって行われ、優秀書評賞2篇と佳作3篇が決定された。今年度も最優秀書評賞の該当作品はなかった。

今回も応募要件を充たさないために審査の対象外となった作品があった。本文が40字×40行の設定になっていないものや、本学図書館に所蔵されていない図書を対象としているものなどである。応募要項をよく読んでいただきたい。また、応募作品の中には明らかな剽窃と断定されたものもあった。剽窃が最も恥ずべき行為であることは言うまでもない。絶対にしないでいただきたい。

書評においては、本の内容を簡潔かつ的確に要約

した上で、その本の良い点や悪い点を具体的・説得的に示す必要がある。応募作品の殆どは、内容紹介にとどまらず何らかのコメントを付けていたが、単に「面白い」とか「深く考えさせられる」、「お薦めの一冊」という類の表面的な指摘にとどまるものも少なくなかった。どこがどう面白いのか、何をどのように深く考えさせられたのかを、自分自身の言葉で読み手に伝えるように説明してほしい。その際、書評全体の構成を十分に検討し、わかりやすく適切な文章で表現することも大切である。

今回の入賞者5名中3名は、過去の入賞経験者である。優秀賞の根来君は今回で3年連続入賞、同じく優秀賞の中川さんは2年連続入賞、佳作の木谷さんは何と4年連続入賞である。この書評賞の審査は、応募者の氏名を伏せたうえでの投票と審議により行われるから、過去の受賞歴は一切考慮されない。それなのに、多数の応募者の中から何度も入賞するということだから、審査員一同脱帽というしかない。大変な力量の持ち主たちである。

優秀賞の2作品のうち『ラッシュライフ』の書評は、審査員の評価が最も高かった。原作は奇想天外でトリッキーなミステリー仕立ての小説であるが、評者は

作品に込められた作者の意図を自分なりに把握しようと考え抜いている。その真摯な姿勢と議論の説得力は高く評価できる。また、作品の内容紹介そのものは簡単にとどめ、読者の興味を誘うように巧みな表現を織り交ぜながら考察を進めることによって、原作のイメージをくっきりと浮かび上がらせているところもまことに見事である。

もう一つの優秀賞受賞作、『コルシア書店の仲間たち』の書評も評価が高かった。原作はミラノでの著者の体験を綴ったエッセイ集であり、全体を貫くストーリーがあるわけではない。しかし、評者は手短にその内容を紹介した上で、書評の焦点を作品全体のテーマ、文章表現の美しさ、その背景としての翻訳家の経歴に絞ることによって、原作のもつ魅力を余すところなく読者に伝えている。構成がよく、読みやすく説得的であり、また原作に劣らぬ洗練された文章という点で、とても完成度の高い作品である。

佳作 3 篇の中では『図書館の神様』の書評が一步抜き出していた。原作は心に傷を負った主人公の再生のプロセスをその日常生活を通じて淡々と描いたものである。評者は、このどちらかといえば平凡な話の中に込められた作者の意図を自分なりに深く読み込み、持ち前の素晴らしい文章力で生き生きと説得的に表現している。この書評のよさは原作を読むとよくわかり、ある辛口の審査員は、「本書の内容よりも書評の方が『おもしろく』感じる」と絶賛したほどである。

もう一つの佳作の書評の原作、『十字架』は、評者の紹介通り、重いテーマを扱った小説である。評者はこの小説の要点を要領よく的確にまとめており、また小説のテーマや特徴の捉え方も概ね妥当といえる。また、評者がこの小説のどのような点に共感したかもよく伝わってくる。難点をいえば、コメントがやや一般的なことと、文章表現の詰めの甘さが若干目に付くところである。文章を磨き、また、それに説得力を持たせる訓練をしていくことによって、一層の成長が期待される新人である。

最後に、『勝間さん、努力で幸せになれますか』の書評であるが、評者は原作の対談者の主張を非常に手際よく紹介しており、原作に書かれていることはこの書評の内容に尽きるといっても過言ではない。さらに、評者は、二人の対談者の主張に共鳴しつつ、自分自身の生き方を模索しているが、その真面目で前向きな姿勢にも好感が持てる。だが、引用と紹介の部分がいささか多すぎる。二人の主張についてもう少し深く考え抜き、自らの考えをより明確に打ち出すことができれば、もっとよかった。

今回の応募作品も力作揃いであった。また、残念ながら選外に終わった作品の中にも、入賞にあと一步という作品が少なくなかった。来年はさらに多くの諸君が応募するよう期待したい。



## 〔優秀書評賞〕

伊坂 幸太郎 『ラッシュライフ』

根来 厚志（国際教養学部3年次生）

人は一人で生きているのではない。他の人生と複雑に絡み合って、上へ上へと伸びてゆくのだ。エッシャーの、階段が永遠に続く、あの有名な騙し絵の中にいるように、人生を歩く当の本人には何も感じないのかもしれない。しかし確実に、上へと昇っているのだ。

職業をプロの泥棒であると自称し、綿密な調査と準備の元で仕事をする黒沢。飛び降り自殺した父を思いながら、新興宗教の神に魅かれる河原崎。不倫相手の妻を殺害し、結婚を企むカウンセラーの京子。リストラされ再就職先もなく、犬を連れて銀行強盗を企む豊田。彼らの人生はまるで別物だが、そこに宝くじ、野良犬、拳銃、神、駅前のスケッチブック、死体がバラバラになるという噂などのスパイスを加えると、全ての線は波を打ち始め、やがてそれらは交わる点を持つていく。それぞれの時系列の間にはズレが生じていて、読み進めてもまるで時間が進んでいないように思われる。ちょうどエッシャーの騙し絵のように、いくら昇っても、いくら歩いても、全く上に昇れないような錯覚に陥る。

本書を開くと最初に現れるのは、「ラッシュ」という英単語の説明と、エッシャーの騙し絵である。「ラッシュ」という音で綴りの異なる英単語が四つ紹介されており、それぞれ四つの人生を象徴するものであると考えられる。さらに、騙し絵はこの物語の時系列の歪みを意味していると述べたが、さらにおもしろいのは、彼らは序盤と終盤の二度、エッシャーの騙し絵を見て、彼ら一人一人が違った印象を持ち、違った言葉でそれを表現することである。ある者は階段を歩く人をつまらなしいと言い、ある者はその人々を離れた所から見ている人を羨み、またある者は入口の階段で一人離れて座っている者に憐みを抱く。ここから、世界という一つのフィールドに生きる我々の人生は、それぞれの感じ方や捉え方によって、どのようにでもなりうるということ、筆者は訴えたかったのではないだろうか。

四本の線にさらなる意味を持たせているのが、画商で財を成し、金でできないことは何もないと信じる男の存在である。画商の彼は冒頭で、「コルトレーンの名演だ。Lush Life。豊潤な人生。いいじゃないか。私は、今この瞬間、別の場所で同時に生きている誰よりも、豊かな人生を送っている。そう言い切れる」と述べている。しかし物語の最後は画商とは正反対の人生を送る豊田の章で完結し、その後「ラッシュライフ—豊潤な人生」と添えられている。ここで注目すべきは、画商の時にはその単語は英語で書かれ、豊田の時にはカタカナで表記されている点である。これは、画商の時には単語を一個に限定し、豊田の時には単語を限

定しないという意図があるのではないだろうか。画商にとって線は一本で、それだけが正しく豊かであると信じている。しかし彼は導入部と最終部でしか登場しない。うえ、最終部で画商の富は、リストラされた豊田の犬への親愛を動かさなかったことを考え合わせると、筆者の主張が見えてくる。すなわち、複雑に絡み合ったスパイラルの中には俗念は無力であり、一本ではなく複数の線が絡み合うことこそ豊潤な人生である言えるのではないか。

暗闇で様々な色に光っている平行する直線が次第に波打ち、それが不意に意図せず交わりながら上昇し、さらに一本の塔を形成していくような景色が、私には想像できた。あなたも意識次第で何色の線にでもなりうるし、無意識のうちに塔を形成する波線の一本であるかもしれないのだ。

## 〔優秀書評賞〕

須賀 敦子『コルシア書店の仲間たち』

中川 洋子（文学部4年次生）

この本は、今から五十年ほど前、作者須賀敦子が十三年の時を過ごしたミラノでの体験を元にかかれたエッセイである。彼女は、最初憧れのパリに留学するが、あまりに個人主義を尊重するその国民性になじめず、疎外感を味わって帰国する。その留学中に立ち寄ったイタリアに、パリとは違う親しみやすさを感じ再度留学を決意する。その時、本好きの彼女が通っていたのが、大聖堂の近くにある「コルシア・ディ・セルヴィ書店」という名の小さな書店であり、一年半後、彼女はその書店を切り盛りしていたペッピーノと結婚する。その書店に集う、彼女とペッピーノを取り巻く人々が、一話一話の主人公である。

この書店を立ち上げた一人であり、カトリックの神父でありながら社会運動に熱心で、教会当局から睨まれているトゥロルド神父。アルコール中毒で亡くなった姪や社会運動に傾倒して家業を継げなくなった甥など醜聞を抱え、戦後の革新的な社会の流れの中にあっても、いつまでも凜とした風格を失わなかった上流階級のツィア・テレーサ。不幸な生い立ちからか、いつも愛情を求めて彷徨っているようなジャーナリストのガブリエーレ。年老いた父が若い妻を迎えたために、四十歳くらい年の離れたかわいい妹ができてしまい、近所の評判が気になって仕事が手につかない編集者のガッティ。みんな人生の厄介ごとを抱え、模索しながらも必死で生きている。その生き様は、時に奔放でありながらも、なぜか悲しく、「生きる」ということについて考

えさせられる。そして、彼らは敦子にとって、身分や立場が違って、互いに心を分かち合った大切な仲間であり、日本とは全く違う環境にたった一人で飛び込んでいった東洋人の彼女を、暖かく迎え入れてくれたコミュニティの一員であった。彼女は、分け隔てなく自分を受け入れてくれた彼らを通して、懸命にイタリア文化を理解し、社会に溶け込んでいった。彼女は淡々と語っているけれども、その文章を通して、一人で異文化に立ち向かう心許なさや、パリ留学では得ることのできなかった人と人とのつながりの暖かさがじんと伝わってくる。

海外旅行が特別のものでなくなった今、ロングステイ体験を面白おかしく綴ったエッセイはたくさん出版されている。しかし、この本は決して海外生活を紹介するガイドブックではないし、一枚の写真や挿絵すらもない。それでも、彼女の表現はとて繊細で美しく、まるで風景画を見るような柔らかさと、古い映画を見るような臨場感がある。まるで自分がその場にいるように、登場人物の行く末を案じ、また、使い古された書棚のつややかな表面をなでるような感触や、窓から見える海の青さ、秋の森の空気の冷たさまで感じられるから不思議である。

彼女の文章に引きずり込まれるような魅力があるのは、彼女の生きた波乱万丈の人生と長年に渡る翻訳家としての経歴に理由があるだろう。彼女は、ペッピーノと結婚してから翻訳家として出発し、エッセイを書いたのは、晩年の十年ほどであった。彼女の作品は、イタリア語から日本語だけでなく、日本語からイタリア語に翻訳されたものも、文章内容ともに高く評価されている。また、父との確執や、彼女の人生の中で、生涯忘れ去ることができなかったであろうパリ留学のつらい体験、やっと心地よい居場所を見つけた矢先の夫の死、余儀なく帰国した日本で、傷心の心を癒すかのように熱中した、貧しい労働者と共同生活を送るエマウス運動など、彼女は悩み迷いながらも一步一步進んできた。その人生の集大成が、長年に渡る翻訳のキャリアの中で吟味され、積み重ねられてきた美しい言葉と鋭い感性で綴られているからこそ、彼女の作品は人を魅了するのだろう。

## 〔佳作〕

瀬尾 まいこ『図書館の神様』

木谷 友子（文学部4年次生）

本書は瀬尾まいこによって書かれたヒューマンドラマである。

主人公、早川清(はやかわきよ)はその名の通り清

く正しくをモットーに生きてきた。しかし、高校三年生の、彼女の放った「正しい」言葉が一人の女の子を自殺に追い込んでしまう。以来、正しさを捨てすべてを諦めた彼女は、情性と妥協の果てに、とある鄙びた高校の国語講師となった。全く興味もやる気もない文芸部の顧問を押しつけられ、重い足取りで向かった図書館で、文芸部唯一の部員「垣内君」と出会う。抜群の運動神経を持ちながらスポーツもせず、図書館に籠もって日々文学に勤しむ彼を理解できない清。しかし、彼と過ごす図書館での毎日は、次第に彼女の心を動かし、温めていく。様々な出会いと別れの中で、主人公が自分を見つめ直し新たな道へ進むまでを描く、再生と出発の物語である。

この物語は何か大きな事件や劇的な展開があるわけではなく、淡々と続く主人公の日常が描かれている。その中で、非常に細やかな心理描写が成されていて、あつというまに物語に引き込まれていく。無気力だった主人公の心が、いつしか当初とは180度真逆の意見を述べるほど変化し、どんどん人間的な魅力が増していく課程が非常に面白いのである。

本作品のテーマとして、随所で触れられている「正義とは何か」が挙げられる。清は正しくあることで自らの高潔を守ってきた。しかし、皮肉なことに、それは万人における正義では無かった。正論を振りかざして誰かを傷つけることは正義か。逆に、誰かを傷つけないために間違いに目を瞑ることは正義なのか。答えはきっと誰にも出せない。「正義」という言葉の曖昧さを本書では深く考えさせられる。

不倫は決して正しくない。学習範囲に沿わない授業は正しくない。ルール通りに取り組まないバスケットボールは正しくない。図書館でサイダーを飲むことは正しくない。だが、これらの正しくないことは、清の心を育み、自分を取り戻すきっかけとなった。彼女にとってその時必要な正義であったのだと思う。正しいことは正しく、悪いことは悪い。しかしあまりに「正しさ」に縛られ過ぎると、他人を傷つけ、自分の身動きすら取れなくなるということに気付かされた。

さて、本書の最大の見せ場は、なんとと言っても物語終盤の文芸部の発表のシーンである。体育館の壇上で、「垣内君」は用意していた論文原稿を突如ポケットにしまってしまう。そして、あつけにとられる生徒たちを前に、胸を張って語り出す。文学こそが自分を新しい世界に連れ出す存在であり、自分が今どれほど楽しく幸福であるか、と。きらきらと輝く、まるで夢を語る子どものような垣内君の姿は、生徒たちのみならず読み手の私でさえも、思わず拍手を送ってしまいたくなるほど胸を打った。主人公と同じく心に傷を負い、ひどく老成したクールな彼が、年相応の少年らしさを垣間見せた瞬間でもあった。清と「垣内君」は最初から最後まで「先生と生徒」であり、その距離感が縮まることはなかった。しかし、二人で過ごした図書館での一年間は、清を救い、「垣内君」の心にも変化を与えた。きっと、

お互いがお互いにとっての「神様」であったにちがいない。

自分を外の世界へと導くもの。それは、本書の中では、冒険者にとっての船であり、「垣内君」にとっての文学であり、主人公にとっては教師としての道であった。では、自分はこれから何を見つけられるのだろうか。そう思うと急に目の前がぱあっと開けた気がして、期待に胸が膨らむ。自分を見失い立ち止まっている人、また、自分の進む道に不安を感じている人に特にお勧めしたい一冊である。

〔佳 作〕

重松 清『十字架』

高橋 未央（経済学部1年次生）

現代社会では、いじめはどこにでもある。いじめを題材にしたドラマや本も多数でている。そして、どれも可哀想だとは思いうけれど他人事で終わらせてしまう自分がいた。しかし、かつてこんな視点で描かれた本は今までにあったらどうか。私は、読めば読むほどこの物語の世界観に引き込まれていった。

この作品は、主人公の同級生俊介がいじめを苦に自殺をすることから始まる。残された遺書に「親友」と刻まれた主人公、「許さない」と書かれたいじめた人、「ごめんなさい」と書かれた女の子。そこで主人公は、親友にも関わらずなぜいじめを止めなかったと俊介の父親に責められる。しかし、実際には小学校までは幼なじみであったが中学生になってからは同級生の一人にすぎなかった。なのに「親友」とよばれた主人公は重たい十字架を背負って生きていくことになる。新しい思い出は増えていっても、あいつの影は消えることはない。その後の残された遺族との関わり、主人公の迷い、悩み、傷付きながらも成長していく人生が展開されていく。

いじめられた側でもなくいじめた側でもない第三者側を主人公にして描くのはめずらしい。その難しい心情も鮮明に描かれており、その図もイメージできる。そして、より読者の心にも突き刺さるような表現がされている。ただだまって罪を見過ごすことの重さを訴えているように感じる。物語全てが重苦しく書いてあり、不快に感じる部分もあるがそれがこの作者の良さでもあると私は思う。人間が目を見せられて生きていきたいと思う部分も全てストレートに書いてある。だから、余計に作者の想いがピンピン伝わってくる。

「親友」とたった二文字遺書に書かれただけの主人公の生き様に心痛くなる。一度読み始めたら一気に読み通したくなる物語だ。そして、もう一度自分の人生に

ついても改めて考えさせられてしまう。いじめは幅広く存在する。直接的、間接的、相手が不快に思えばその時点でいじめは成立する。すごくシビアで難しい。けれど、それを丁寧に書いてあるのがこの本だと思う。この物語では俊介の父親はずっと「あのひと」と表記されている。そこにも作者の想いが詰まっているのであろう。そこも全部含めて、読んでほしい。子供だけでなく親にも読んで欲しい一冊である。

## 〔佳 作〕

勝間和代、香山リカ

『勝間さん、努力で幸せになれますか』

堂馬 悠理香（法学部4年次生）

この本は、一言で言えば、「努力すれば自分も世界も変えることができる。」と言う経済評論家の勝間和代と、「努力には限度がある。成功することに囚われてはいけない。」と言う精神科医の香山リカが自らの実体験を通じて語る、対談本である。

勝間は成功者の一人である。「カツマー」と呼ばれる信奉者を持ち、社会現象を引き起こす等、多くの人々を惹きつけている人物である。一方、香山は精神科医として「心の病」を持つ人を診療し、不条理で引き起こされる現実の多さを見てきている人物である。

香山は言う。『「自分は幸せではない」と訴える女性には 2 通りいる。一つは現実的に本当に大変な状況にある人達。もう一つは努力しすぎて鬱状態になってしまう人達。』理想モデルを頭の中に描き、自分と闘いをする。その理想モデルの一人が勝間であると言うのだ。それに対して、勝間は『私は自分が頑張らなくてもいい方法を探しましょう、というスタンス。実体験を通じて一番合理的で楽な方法を著書で示しているので、そのエッセンスを自分なりにアレンジして、使い倒して欲しい。』と述べている。香山は『読者は誤読をしていると思う。ゼロイチ思考でしか物事を考えられない人が増えている中で、「勝ちか、負けか」の多様性を欠いた社会が完成してしまうのではないかと思い、理想モデルのような何かに「しがみつく」生き方をやめてほしいと思う。』と反論する。それに対して、勝間は『努力というのは、別に苦しいものではない。努力そのものが幸せなのだ。』と言う。香山は『その感覚が全く理解できない。苦行でしかない。』と言う。

その後、勝間は香山の言うことに理解を示そうとするが、香山は勝間の言うことを聞き入れようとしない。その理由はあながきの勝間への手紙で書かれている。『本当に人は努力しなければならないのか。人生は不確定要素、理不尽なアクシデント等があり、承認を得

られないような弱い人は生きている価値が低い人となるのか。この点は、何度説明されても納得することは出来なかった。』と。私は、この点について香山の意見に賛同する。努力したくても出来ない状況にある人は存在し、努力しても報われないこともある。私は読んでいて、香山の言うことの方が賛同できた。しかし、でも、と思う。でも、勝間はそんな香山の言うことを受け入れた上で、あらゆる人に幸せになってほしいと願って本を書き続けている。『私にとっての幸せの定義とは、先人や自分の経験を生かして、できなかったことを積み上げていくこと。さらに、自分の力を生かして、周りの人に貢献し、喜んでもらうことが能力開発以上の至福になる。私は、社会全体が一人の人間だと考えている。格差問題や国際紛争等は、体のどこかに痛みが走っているということだから、予防や治療が必要。』と、自分のことだけではなく、周り、世界にも目を向けている。しかし、香山からしたら勝間のような考え方は偽善的としか受け止められないのかもしれない。

やはり、どちらが素敵かという点、勝間なのである。「諦めたら、そこで終わってしまう。」そんな思いが、私や世の女性達を動かす原動力となっている。

（本文中の『 』部分は、対談者の主張を評者なりにまとめたものである。）

